

あるラーメン店に行くことがある。そこに行くのは楽しみの一つでもある。開店と同時に入店したい。そのために、開店30分前には行くようにしている。

このお店は、開店15分前になると、次から次へと車がやってくる。まるで示し合わせたかのようである。だから、30分前にはお店に着くようにしている。そうすれば、1番か2番めには並べる。すなわち、開店とともに入ることができる。

お盆の時期だった。いつもよりも早めに40分前にお店に着いた。駐車場には、すでに5台も車がある。だが、誰も並んではいない。こういったケースが困る。いったい、いつのタイミングで車から出てきて並び始めるのか。順番からすれば私は6番めである。順番を知っているのは、最初に来た方だけであろう。その方が仕切って、皆さんを並ばせるのか。そんなことはないだろう。

きっと、車の中で、互いに様子を見ているのである。そこには、できれば長時間並ぶのは避けたいという心理が働いている。どうすればよいのか。このまま6番手として、車の中で待機するか。もし、7番めの方が来て、すぐに並んだらどうなるのか。

さほどの躊躇もなく、入口から3メートルほど離れて並んでみた。すると、一斉に車から人が出てきた。怖かった。皆さん、私よりも早く来ているのは確かである。どうぞ、どうぞと前に並んでいただくよう勧めた。そのための3メートルである。だが、一組しか前に並んではくれない。この時点で、私は2番手に昇格してしまった。何だかばつが悪い。多少の気まずさが残る。

別に決まりがあるわけではない。駐車場に着いた順なのか、並んだ順なのかも決まってはいない。そう自分に言い聞かせるが、後味の悪さは払拭できずにいた。最初の5台のうちのお一人が並ぼうとしない。それも、車は入口の目の前にある。きっと、この方が1番なのである。開店したら、この方は、どうするのだろうか。私が心配することでもないのだが、気になる。

いよいよ開店となった。1番めのご家族が入っていった。並ぼうとしなかった本当の1番手の方に、どうぞと2番手を譲った。その方は、頭を下げながら、さもそれが当たり前だという雰囲気の中で入っていった。何だか、これで救われたような気がした。

堂々とはいかなかったが、3番手として入店した。さすがは、私にとってのしょう油ラーメン第1位のお店である。美味しい。満足である。

気になって、2番手を譲った方をちらっと見てみた。店員さんが、「〇〇さん、いつものでいい？」と言っているではないか。間違いなく、常連さんである。危なかった。2番手を譲っておいてよかった。お店のシード選手的存在なのであろう。

昔は、ディズニーランドでしか並ばなかった人間が、一杯のラーメンを求めて30分以上も並ぶようになった。人の行動は意外と変わるものである。ちなみに、このお店はいつも混んでいるが、妙に回転がよいので、並んでもそれほど待たずに食べることができる。でも、やっぱり開店30分前には行こうと思う。